

塞ノ神式土器と礪式土器

河 口 貞 徳

Ⅰ 塞ノ神式土器と縄文

南九州では、従来、いわゆる縄文を施した縄文土器は、発見例が少く、後期の磨消縄文や塞ノ神式土器などに見かける程度であった。ところが九州縦貫自動車道の建設に関する遺跡の調査によって、この種の土器が若干発見され、意外に古い時期から、この地にも伝播していたことが判明し、年代的な経過も、いく分わかってきた。そこで塞ノ神式土器が発生するに至った経過を、「縄文」という文様の面から辿って見よう。始良郡溝辺町石峰遺跡は、「縄文」を有する土器が最も多く出土しているので、石峰遺跡から出土した土器を中心に記述する。

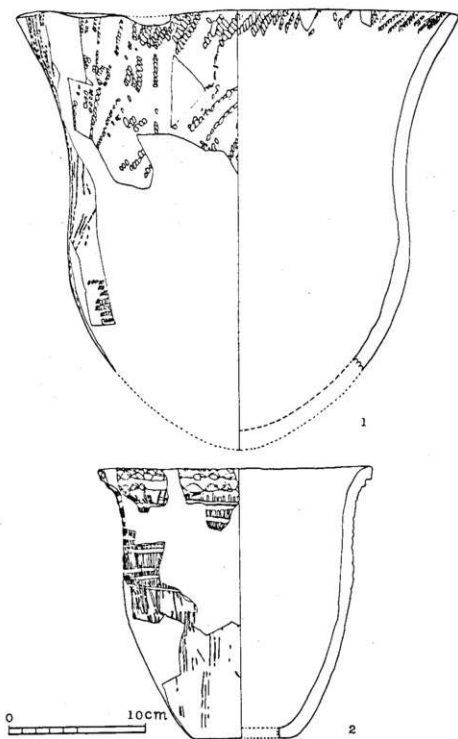
1) 細石器と共伴する縄文土器 (図版1-1)

石峰遺跡には桜島起源の降下礪石層(B.P. 10,100~10,200年)の堆積があり、この層の下は黒色粘質土層から細石器が出土するが、これと共伴して数片の土器が出土した。この中の1片に縄文が施されている。縦2.4cm、幅2.5cmの小片で、厚さは5mmで薄い。胎土は粒子が細かくて焼成は普通であり、色調は灰色がかった黒褐色を呈する。口縁部で内外面に半置半転に類する施文が見られる。

押圧縄文土器の分布は岐阜県九合洞穴までで、以西には見られないとされている。飛び離れた九州の南端に存在するという現象は、現在のところ突出したように見えるが、類例の増加を待つことにしたい。なお志布志町御遺跡では、アカホヤ層の下、更に一層をへだてた下層から押圧縄文土器の出土が報告されている^①。

2) 木場遺跡出土の縄文土器 (図版1-2、図版2-1・2)

始良郡栗野町木場遺跡出土の縄文土器である。桜島降下礪石層並行の地層より出土した深鉢形土器で、口縁部に間隔をおいて2条の刻目凸帯をめぐらし、4ヶ所に、上下2条の凸帯をつなぐ縦位の刻目凸帯を有し、口縁部はゆるやかな波状口縁となっている。口唇部・口縁部の2条の凸帯の間と胴部に、左撚りの単節縄文を施している。刻目凸帯以下の胴部の施文に特徴があり、施文原体を上下方向と左右方向などに変化して廻転押捺しているために、縄文の走行が多様に変化している。焼成は良好で、色調は紅褐色を呈し、器壁の厚さは7~7.8mmである。石峰遺跡出土の、細石器共伴縄文土器に続くものと考えられる。



第1图 燕米文土器（石峰） 1：燕米文土器 2：凸带燕米文土器

3) 燃糸文土器 (第1図-1, 図版2-3)

石峰遺跡第4b層の中位から出土した土器である。石峰遺跡では第3層が鬼界カルデラ起源のアカホヤ層で、第5a層は前述の桜島降下軽石層であり、両層の間が、第4層で、さらに2分され、上位の層が4a層、下位の層が4b層である。したがって4b層の中位から出土したこの土器は、本遺跡では最も古い部類に属する土器である。

本土器は口径31cm、高さ約32cm、胴部がやや張り頸部で僅かにしまり、口縁部は外反する器形で、底部は尖底に近い丸底であろう。文様は、右攪りした($R \left\{ \frac{1}{1} \right\}$)紐を、棒にやや間隔をおいて巻き付けた原体を、廻転押捺して施文したもので、口縁部・頸部・胴上部は、不規則ではあるが、右より左へ傾斜して施文し、下胴部では左より右へ傾斜して施文するか、或いは水平に施文し、また口縁部内面では、幅せまく、密接した施文が行なわれている。

胎土は粒子が細かで、焼成はあまり良好ではない。色調は胴部以下は黄褐色であるが、頸部以上は炭素の付着によって黒色を呈している。

文様の走行に、本場の土器と同様な多様性のある点が注意される。時期的にもこれに続くものであろう。

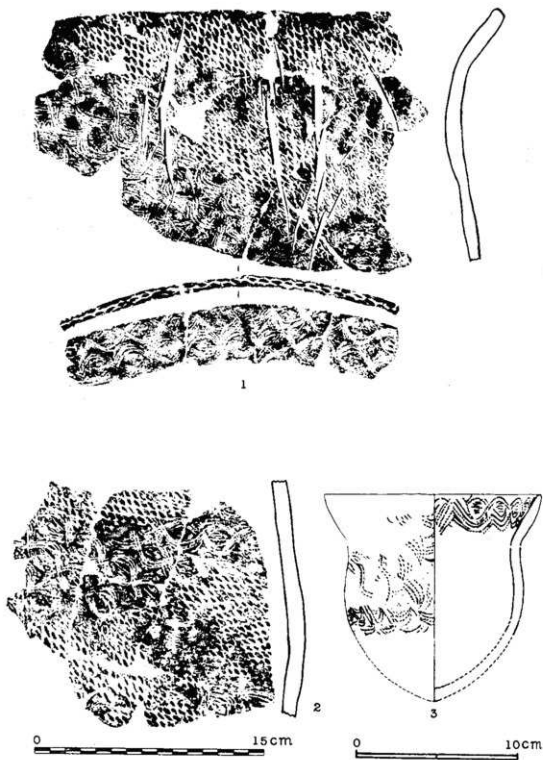
4) 凸帯燃糸文土器 (第1図-2, 図版2-4)

第1図-2の土器である。高さ20cm、胴径16cm、底径7.6cm、僅かに外反した口縁部から、頸部・胴部と変化なく下り底部へしまり、平底に終る器形である。胎土は粒子が細かで、器面は指頭でなでて仕上げし、割に平滑で色調は黄褐色である。口縁内面には指頭圧痕がのこっている。外反した口唇部に細い刻目を施し、口唇部に接して、刻目のある三角凸帯を二条めぐらしている。凸帯の下から底部まで、右攪りの紐(r)による燃糸文を縦に施文し、この上に頸部から胴部へかけて、8条ないし10条の篋描き凹線文を、横位にめぐらしている。

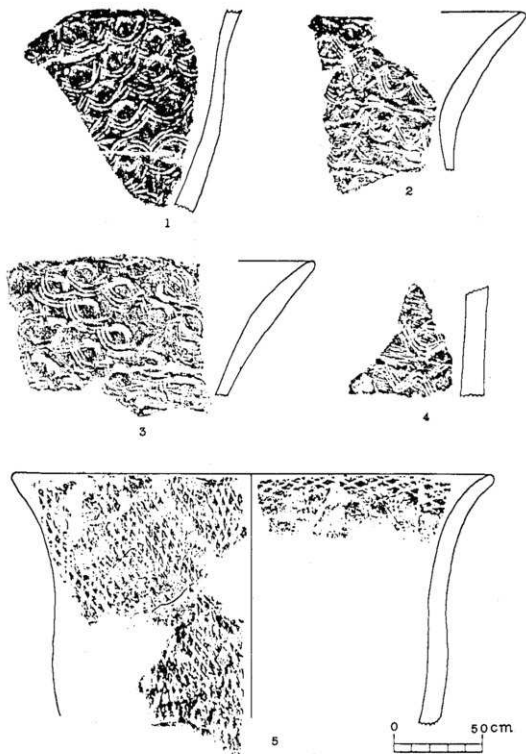
出土の層位は4b層の中位と上位の中間で、第1図-1の土器に後続するものと思われる。燃糸文に篋描きの沈線を加え、純粹の縄文系の文様に他の文様要素が加わって来たことは注意を要する点である。

5) 複節縄文土器 (図版3-1・2)

石峰遺跡でも小片が僅かに発見されただけである。 $R \left\{ \frac{L}{L} \right\}$ の紐2条を左攪りした原体を廻転押捺したものである。第4b層から出土し、この古い時期に、複雑な縄文原体が出現していることは、縄文の手法が、かなり盛行していたことを示すものであろう。この後、縄文原体に種々の変化した形が出現してくるのである。



第2图 变形捺糸文 1・2：石峰式土器（石峰） 3：变形捺糸文土器（平 埴）



第3图 1~4：变形糙米文土器（石峰），5 网目文土器（石峰）

6) 石峰式土器 (第2図, 第3図-1~4, 図版3-3・4)

石峰遺跡の第4b層の終末期になると、燃糸文に複雑な変化が起ってくる。それは平椅貝塚に見られる、数条の燃糸で8字状に施文したものの(第2図-3)や、溝辺町木佐貫原遺跡に出土した数条の燃糸で波状に施文したものなどで、石峰遺跡でも8字状施文の燃糸文土器(第3図-1~4)が出土し、これらの文様は「変形燃糸文」と呼ばれている。

同じ時期に南九州には、押型文土器文化の伝播があり、石峰遺跡では第4b層上部から楕円形押型文・山形押型文土器の出土が見られる。この押型文と変形燃糸文とを同一個体に施文したのが「石峰式」である。器形は、胴部が張り、頸部でしまり、口縁が外反するもので、底部は平底か、丸底と思われる。第2図-1・2, 図版3-3・4が石峰式で、楕円形押型文と8字状の変形燃糸文を交互に施文し、口唇部には押型文、内面上段には変形燃糸文を施している。この施文本体に使用された燃紐はR { 1 } である。この段階では二つの文様要素を交互に使用するという初歩的なもので、土器面の部位によって使いわけられるようなことは行なわれていない。

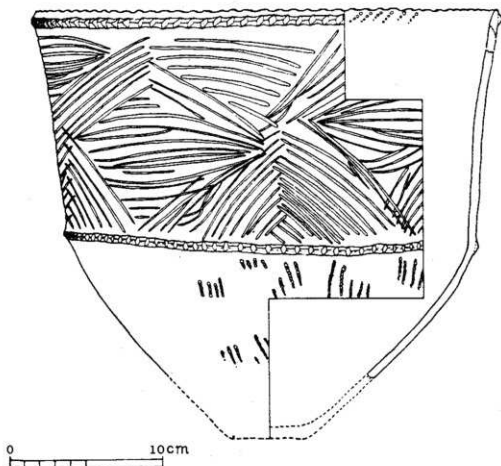
7) 手向山式土器 (第4図, 図版3-5・6)

石峰遺跡の第4a層最下部の時期に手向山式土器(第4図)が出現する。胴部で「く」字状に屈曲して稜線をなし、頸部はしまって口縁部で外反する器形で、底部は小形の平底である。文様要素に、みみずばれ凸帯・刻目凸帯・幾何学沈線文・押型文・縄文などが用いられている。これらの文様要素は、土器の部位によって、凡そ使いわけられており、土器内面では押型文または縄文、頸部では、みみずばれ凸帯又は幾何学沈線文、胴部稜線以下では押型文または縄文というような形がとられている。中には白坂遺跡出土のものでは、頸部に幾何学文と押型文とを重ねて施文したものの、宮崎県高鍋町耳載遺跡出土のものは、口縁内面にみみずばれ凸帯と押型文とを組み合わせたものなどが見られるが、全体としては、土器の部位によって、文様要素を選別して施文するという、一種の規則性が生れている。しかし、押型文と縄文とは、施文される部位が同一箇所、口縁内面と胴部の稜線以下にかざられている。これは、土器製作者が押型文と縄文に対する受け取り方が同じであることを示すものと思われ、外来文化と受けとめる感覚があったかもしれない。

石峰遺跡出土の手向山式土器(第4図, 図版3-5・6)は、口縁内面と胴体稜線以下に燃紐(R { 1 })による燃糸文が施されている。手向山式の場合、石峰式に比べて、異なる文様文化を取り入れる対応について、独自の姿勢が生れつつあることを読みとることができる。

8) 平椅式土器 (第5図, 図版4)

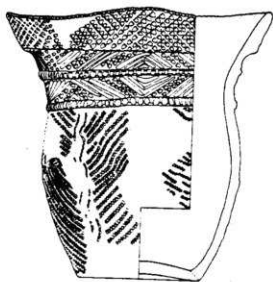
石峰遺跡では、平椅式土器は、第4a層の下層から中層にかけて出現する。胴部に張りを持ち、頸部でしまり口縁部へ外反する、安定した平底の土器である。口縁部に肥厚が見られ、刻目凸帯を



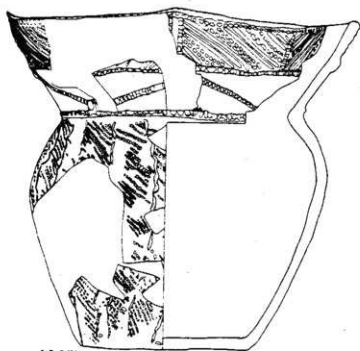
第4図 手向山式土器（石峰）

めぐらすものも見られ、ゆるやかな波状口縁をなすのが一つの特徴といえる。文様は、手向山式に始まった、土器の部位によって、特定の文様を施文する手法が一層明確になり、口縁部と胴部とで施文の種類が規定される。即ち口縁部には幾何学的沈線文・連点文を施し、胴部には、いわゆる結束第2種の縄文^②を施すのが、この型式の規制となっている。

図版4は、石峰遺跡出土の平埴式土器の型であるが、施文原体は、右燃りの紐（ $R \left\{ \frac{1}{1} \right\}$ ）と左燃りの紐（ $L \left\{ \frac{1}{1} \right\}$ ）を、中央でかけあって連結し、それぞれが2本となる。右燃りの紐は、一方で相手をからんで、中央の連結部に接続して、結束を2ヶ所作り、後に2本の紐を左燃りする（ $L \left\{ \frac{R}{R} \right\}$ ）。他方の左燃りの紐は、中央の連結部からただちに、2本の紐を右燃りする（ $R \left\{ \frac{L}{L} \right\}$ ）。これで施文原体は出来上りである。これを上下方向に回転押捺すれば、縦に2条のS字状縄文を挟んで、両側に羽状の縄文ができる。第5図-1がそれである。同図-2は、右燃りの紐（ $R \left\{ \frac{1}{1} \right\}$ ）2本を合せて、左燃りし、途中で片方の紐で相手をからんで結束を作り、また続けて左燃りする（ $L \left\{ \frac{R}{R} \right\}$ ）。



1



2

0 10cm

第5图 平脐式土器(石峰)

この原体によって、1条の波状燃糸文を挟んで、両側に同じ傾斜をもつ斜行縄文が施文される。

9) 塞ノ神Aa式土器 (第3図-5, 第5図-1, 第6図-1, 図版5, 図版6)

石峰遺跡では、第4a層の中層から上層にかけて出現する。円筒形の胴部に、ラッパ状に開いた口縁部の付くもので、平樽式の要素を残して、波状口縁を呈するもの、口縁部が僅かに屈曲するものが若干見られる。底部はやや上げ底気味の平底である。内面の口縁部と胴部の界に明瞭な稜線を形成するのが、塞ノ神の四型式を通じての特徴となっている。

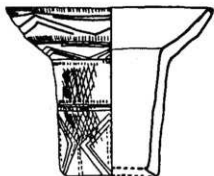
石峰遺跡では、第4a層の中層の時期に、網目文(第3図-5, 図版5-1・2)が出現する。図版5-1は、右燃りの紐(R { 1 })を棒に交錯して巻いた施文原体を廻転押捺したもので、同2は一本の右燃りの紐(r)を使用している。これらの網目文を主とする縄文と、平樽式にも見られた幾何学文・連点文とを施文しているのが塞ノ神Aa式土器である。

塞ノ神Aa式の場合も、平樽式と同様に、土器の部位によって、施文する文様の種類が規制されていることは、手向山式以来の伝統の様相を示している。即ち、口縁部には幾何学文・連点文を配し、胴部には燃糸文系の縄文を施文するのである。ただ平樽式と異なる点は、胴部にも幾何学文・連点文が施文されていることで、網目文や、まれに燃糸文が縦に施文された後で、その上に更に篋指きの凹線を重ねて施文しているのである(図版5-3~5)。

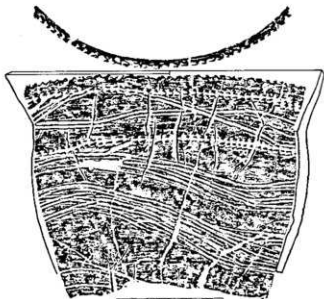
塞ノ神Aa式に施された縄文の種類を見ると、遺跡によって多少の差異はあるが、網目文が主で、僅かに燃糸文を施すものが見られ、それらの施文は上下方向に廻転押捺されるのが特徴で、横位斜位に廻転押捺したものは見られない。この点が塞ノ神Ab式と大いに異なる点である。遺跡による実数を示す。吉田町小山遺跡では、塞ノ神Aa式において、網目文を施文した土器の数は、総数35個中33個で、95%を占め、燃糸文を施した土器の数は僅かに2個で6%にすぎない。一方同遺跡の塞ノ神Ab式について見ると、総数46個中、網目文を施した土器の数は22個で48%となり、一方燃糸文を施文した土器の数は、19個で41%となり、新たに縄文を施文した土器が出現し、その数が5個で11%となっている。

知寛町和田前遺跡・国分市平樽貝塚・志布志町石籠遺跡などでも同様な結果が見られ、この現象は普遍的なものと思われる。網目文を単独に施文した土器が出現するのが、石峰遺跡の第4a層の中層の時期で、塞ノ神Aa式より僅かに早いか、あるいは同時期頃である。したがって、塞ノ神式のうち、最初に出現した塞ノ神Aa式には、平樽式を踏襲して、網目文が器体の胴部に施文されているのである。

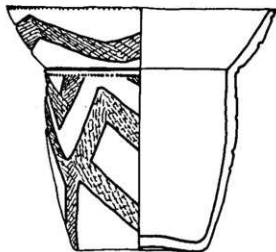
縄文系の文様の取り入れ方について、平樽式と塞ノ神Aa式について比較すると、平樽式の場合は、施文すべき器体の部位を定め、口縁部には幾何学文・連点文、胴部には結束第二種の縄文、と明確に規定されている。それに比べ塞ノ神Aa式の場合も、胴部に縄文系の文様を施文する点では、平樽式と同様であるが、塞ノ神Aa式では、胴部に、縄文系の文様を施すだけでなく、更に幾何学文・連点文を、その上に重ねて施文するという、新しい手法を開発しているのである。これは文様



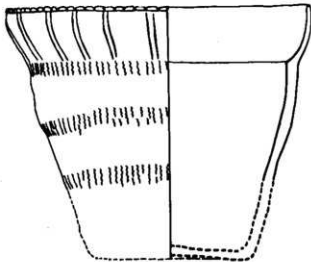
1 壺ノ神A n 式



3 壺ノ神B c 式



2 壺ノ神A b 式



4 壺ノ神B d 式



第6図 1:(石坂) 2:(銅谷) 3:(平橋) 4:(銅谷)

構成の上で一つの試みが行なわれているのであって、一つの画期と見ることができよう。

塞ノ神式は、Aa式・Ab式・Bc式・Bd式の四型式に分かれる^③。この分類の妥当性について述べておきたい。塞ノ神式に限らず、すべての土器型式の設定についての問題であるが、現在行なわれている数多くの発掘調査に従って、それに伴う発掘報告書が盛んに発刊されている。これらの報告書を読んで気付くことは、執筆者の主観によって、盛んに土器の分類が行なわれていることである。分類は研究上必要な手段であるかもしれない。しかし、いたずらに分類を行うことは、研究を煩雑にし、読者にも無用な労力を強いることになりかねない。現在定着した型式に属するものまで、不必要に分類し、或いは新たな型式名を付けるなどは、無用というより、有害といえよう。分類を行なう場合は、その妥当性を証明するところまで研究を進める姿勢をもち、実現すべきであろう。不必要、無責任な分類は無用である。

分類が妥当であるか否かは、遺跡によって客観的に証明することが最善の方法であり、また必ず経なければならない手順であろう。一つの型式が、一つの地層から単純に出土するような遺跡が発見されれば、その型式設定は妥当なものといえよう。例えば、知覧町石坂上遺跡では、第3層から塞ノ神Aa式土器のみを単純に出土している。この遺跡の出土状況から見て、塞ノ神Aa式は妥当な型式と判定することができよう。

1985年に縄文研究会から刊行された「塞ノ神式土器」は、九州各県の塞ノ神式土器に関する資料の集成である。これに掲載された、平埴式・塞ノ神式の地名表は、型式分類の妥当性を判断するのに良い資料となっている。この地名表によれば、九州各県における、平埴式・塞ノ神式を出土する遺跡の総数は272遺跡、そのうち鹿児島県が最も多く113遺跡、続いて熊本県が64遺跡、第3位は宮崎県と大分県で29遺跡となり、福岡県・佐賀県・長崎県が少なく、13～11遺跡であり、この数字は、平埴式・塞ノ神式が、南九州に発生して他地域へ伝播していったことを物語るものといえよう。このことは、縄文系文様と他の文様要素との結びつきが、南九州の地域的現象として始まり、石峰式として創造され、手向山式に受けつがれ、平埴式に至って拡域化の道を辿ったことによって裏付けられる。

上記の遺跡地名表を通覧すると、各遺跡には全部の型式を出土するものから、一型式を単純に出土するものまで、第1表2に示されるように、型式組成の類型には種々のタイプが見られる。これによって各型式の間の系統的な結びつきも推察される。たとえば、平埴式と塞ノ神Aa式とを出土する遺跡は12遺跡、塞ノ神Aa式と塞ノ神Ab式を出土する遺跡は24遺跡、塞ノ神Ab式と塞ノ神Bc式を出土する遺跡は6遺跡、塞ノ神Bc式と塞ノ神Bd式を出土する遺跡は12遺跡という数字が見られ、型式の内容面で、縄文系から貝殻文系へ移行する塞ノ神Ab式から塞ノ神Bc式の間にギャップが感ぜられるが、この両型式を出土する遺跡数が6遺跡となって、最も少ないものこの間の、型式移行の様相を示すものと思われる。また二つの型式間で密接な関連が考えられる遺跡類型に多い数字が示されるのも、型式間の系統的親疎を示すように思われる。

地名表に見られる遺跡総数272遺跡のうち、108遺跡は一つの型式を単純に出土する遺跡である。型式別に見ると平埴式が14遺跡、塞ノ神Aa式が26遺跡、塞ノ神Ab式が38遺跡、塞ノ神Bc式が7遺

第1表 (1) 型式別遺跡数

型式 県名	平 埴	塞ノ神Aa	塞ノ神Ab	塞ノ神Bc	塞ノ神Bd	遺跡数
福 岡	2	1	7	1	4	13
佐 賀	3	2	1		6	11
長 崎	5	6	5	2	7	13
大 分	5	1	7	2	13	29
熊 本	3	5	17	1	6	64
宮 崎	3	12	8	2	8	29
鹿 児 島	11	24	19	11	9	113
計	31	51	64	19	53	272

(2) 遺跡の型式組成類型 (数字は類型の数)

福 岡				○	4	○	
佐 賀			○	○	1	○	
長 崎	○	1	○	○	2	○	
	○		○	○	1	○	
	○		○	○	1	○	
			○				
大 分			○	3	○		
				○	1	○	
熊 本		○	1	○	1	○	
	○	1	○	○	1	○	
	○		○	○		○	
	○		○	○		○	
宮 崎	○	○	○	1	2	○	
		○	○	2	○	○	
		○	○	1	○	○	
鹿 児 島	○	3	○	○	○	○	
	○	10	○	○	2	○	
	○	2	○	○	3	○	
			○	1	○	○	

「塞ノ神式土器」により作成

第2表 単純遺跡

型式 地名	平	枋	塞ノ神Aa	塞ノ神Ab	塞ノ神Bc	塞ノ神Bd	熊			尾	跡			
本	船原下			合田	板屋		本			新山八幡裏				
岡				深原			宮	満田	日子山	八幡前		入料		
佐	番田千東					寺ヶ里	宮	親木	竹尾	持田中尾		加藤尾		
長	金立開拓					夕ヶ里			前原西	原口				
質	肥前国府跡					志波屋六本松			堂地西	上ノ原				
						下朝日			赤坂	こよりげ				
						鈴鹿	崎		群六原					
長	岩谷口岩陰					つくぬきはな			前畑					
崎						池田		東黒土田	木牟礼城	日勝山	柳ヶ迫	中迫		
						大板部島海中洞穴		小浜貝塚	永山	木崎原	沢牛田			
大	平草杉園	西園B	三本松	川原田洞穴			座	二本松	中尾田	星ヶ峯	西之平			
	向原		成仏岩陰		鳥ヶ塚			山神	枋ノ原	塞ノ神	立野			
	下音生B		政所		龜石山				早馬迫	白坂				
	山中A		天神原北		杉塚				宮ノ後	木佐貫原				
	崎山				戸ノ上				宇都ヶ山	苦辛城				
分					仏面				引地	ニッ谷				
					寺の前				公会堂上	永野				
					右京西				倉野	上崎原				
									小西	輪地々山				
熊		藤田清	高山	廻迫	村山C				赤木	住吉				
			中後迫		段岡				前原	輪之尾				
			藤島		鳥崎				定塚					
			上の原		清名木照				下迫C					
			塚原						覆之俣					
			曲野											
			射場ノ本				計	14	26	38	7	23	108	
			荒毛											
			高城											
本			小山田											
			五本松											
			満田											

「塞ノ神式土器」より作成

跡、塞ノ神Bd式が23遺跡と、数に相違はあるが、すべての型式に単純遺跡が存在している（第2表）。このことは、平埴式および塞ノ神式の四型式が、それぞれ独立した土器型式であることを示すものである。

10) 塞ノ神Aa式土器 （第6図-2、図版7、図8）

平埴貝塚では、第Ⅱ層から出土する。やや張りのある円筒形の胴部に、ラッパ状に開いた口縁部が付く点では塞ノ神Aa式の形勢をよく伝えるが、胴部の張りが僅かに勝り、口縁部は平坦である。底部は上げ底気味の平底を呈することも塞ノ神Aa式に通ずる。

施文法については、塞ノ神Aa式に比べ、著しい特徴が現われる。Aa式では、幾何学文・連点文と、網目文とが、重ねて施文されるという方法で、両文様要素を結合し一体化させることで一期を画した。Ab式では、更に一步を進めて、幾何学文と縄文系文様との両文様要素を、内面的に融合させて、一体化した文様を創造した。即ち幾何学的な窠描きの枠文を描き、その枠内を縄文系の文様で満ち、両文様要素を駆使して一つの文様を描き出すという新しい施文法である。ここに至って、縄文と在地の文様要素との結びつきは極致に到達したというべきであろう。施文法のあゆみも終極に達すれば、また新たな歩みが始まる。それが貝殻を施文具とする、新しい文様への転化であった。

口縁部に幾何学文・連点文、胴部に縄文系の文様を施文するという規制は、両文様要素が融合して一体化し、一つの文様要素となったことによって、当然の結果として、その規制も消滅して、器面全体に新しく生れた、枠によってふちどりされた縄文系文様が施文されるようになった。

Ab式に用いられる縄文系文様は、Aa式が網目文を主としたのに対し、新たに蕨糸文が加わり、一部縄文も加わるようになったのは前述の通りで、図版7・8はその実態を示すものである。

平埴式および塞ノ神式の四つの型式が、それぞれ独立した型式であることは前に述べたが、そこで、それらの土器を出土する数遺跡の層序（第3表）によって編年すると次のとおりである。

平埴式→塞ノ神Aa式→塞ノ神Ab式→塞ノ神Bc式→塞ノ神Bd式

縄文系文様と他の文様要素とが、石峰式→手向山式→平埴式→塞ノ神Aa式→塞ノ神Ab式、という変遷のなかで、段階的により深く結びついて行く過程がよく示されている。即ち、① 縄文と他の文様要素が単純に隣接施文される段階（石峰式）。② 縄文と他の文様要素とが、特定の部位に施文するという規制が出現する段階（手向山式）。③ ②の規制が確定する段階（平埴式）。

④ 縄文と他の文様要素が結合を始める段階（塞ノ神Aa式）。⑤ 縄文と他の文様要素とが、内面的に融合して一つの新しい文様を創造する段階（塞ノ神Ab式）である。異なる文様文化が接触して結合して行く一つの過程をよく示すものであるが、これがまた平埴式から塞ノ神Ab式に至る型式変化の推移を良く説明することにもなっている。

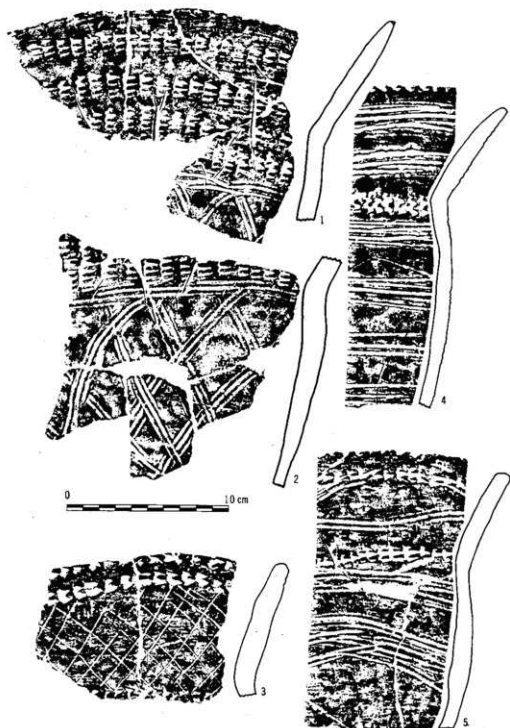
第3表 南九州早期土器の層位別出土表

遺跡 土器型式	石 峰 遺 跡	平 埴 遺 跡	吉 田 大 原 遺 跡	石 坂 上 遺 跡
連点銀櫛文	Ⅳb 黒色粘質土層下部			
○ 銀文	Ⅳb 黒色粘質土層中部			
石 坂 式	Ⅳb 黒色粘質土層中部		Ⅲ 黒褐色粘質層下部	Ⅲ 黒褐色粘質層下部
吉 田 式	Ⅳb 黒色粘質土層中部上	V 黒色バミス泥り層下部	Ⅲ 黒褐色粘質層上	
前 平 式		V 黒色バミス泥り層下部		
○ 系文 凸野焼	Ⅳb 黒色粘質土層中・上部中間			
細 網 目 文	Ⅳb 黒色粘質土層上部			Ⅲ 黒褐色粘質層中部
手 向 山 式	Ⅳa 黝灰青色硬質土層下部			
平 埴 式	Ⅳa 黝灰青色硬質土層中部	V 黒色バミス泥り層上部		
塞ノ神A a 式	Ⅳa 黝灰青色硬質土層上部	Ⅳ 茶褐色土層下部		Ⅲ 黒褐色粘質層上部
塞ノ神A b 式		Ⅳ 茶褐色土層		
塞ノ神B c 式	Ⅳa 黝灰青色硬質最上部	Ⅲ 黒褐色土層下部		
塞ノ神B d 式	Ⅳa 黝灰青色硬質土層最上部	Ⅲ 黒褐色土層下部		

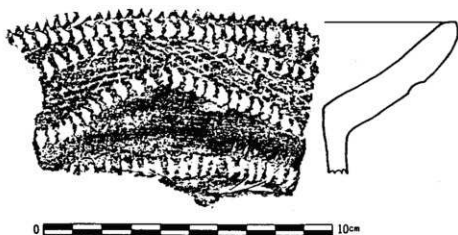
Ⅱ 塞ノ神式土器と貝殻文

塞ノ神式土器には縄文系の文様を施すものと、貝殻を施文具とする文様を施すものがある。両者を二分して別型式とする考えもある。しかし両者は器形や文様構成などから見て、一つの系列に属し、しかも近縁性が濃厚であって、第1表(2)の型式組成の類型もその事と関連があるようである。

両者が一つの系列上に存在し、しかも縄文を有するものから、貝殻文を施す土器に移行するに至る過程を証明する例として、第8図の土器を挙げよう。平埴貝塚出土の塞ノ神式土器の口縁部である。この土器は口縁部の文様に、網目文と貝殻による刺突文の二つの要素をもっている。あらかじめ薄く描かれた枠に従って、左から右へ網目文の原体を、山形に廻転押捺し、その縁に沿って、ふ



第7図 1～3：塞ノ神Bd式土器 4・5塞ノ神Bc式土器



第8図 塞ノ神A b - B c移行土器（平橋）

ちどりする形で貝殻による刺突文を連続して施文したものである。この他に貝殻による刺突連点文は口唇下と頸部にも一条づつ施文されている。尚、口唇部における刻目は、従来の窠によって施文されている点も注意される。同種の例で、志布志町山ノ上遺跡では、胴部に張りのある土器で、口縁部には貝殻による連続刺突文、胴部には窠描きの枠内に縄文を施したものが出土している。

第3表に示す層序によって明らかなように、塞ノ神A式が先行し、塞ノ神B式が後出するのであるが、前記のように両型式の文様要素を併せもつ土器が出現するのは、塞ノ神A b式から、塞ノ神B c式へ推移する時の現象であり、両型式が切り離すことのできない関係にあることを物語っている。

ここに注意されることは、縄文と貝殻文とを併有する土器が、いずれも枠を有するか、或は枠に代る、ふちどりの連点文を有することで、これらの土器が、枠を有するA b式・B c式とに関係を有するもので、枠のないA a式・B d式には直接の関係がないことを示している。

11) 塞ノ神B c式土器 （第6図-3、第7図-4・5）

平梅貝塚の第Ⅲ層から出土する。器形は塞ノ神A b式に類似し、胴部の張りがやや強く、口縁部はラッパ状に外反する器形で、底部が僅かに上げ底気味などところもA b式に近い。貝殻によって施文するのが特徴で、口唇部に刻目、口縁部、頸部に刺突連点文を施す。胴部には波状あるいは横位に、窠による区画（枠）を設け、縄文の代りに貝殻条痕によって区画内を満たすもので、窠描きによる枠を設けず、貝殻による条痕だけで同様の効果をあげたものもみられる（第7図-4）。A b式の枠内に縄文を施文する手法を受け継いで、縄文の代りに貝殻条痕文を施すのが特徴である。塞

神Ad式よりやや下層から出土する。

第6図-3(第7図-5)・第7図-4の土器は、内外面ともに貝殻によって器面調整を行ない、後で仕上げを行なっている。

12) 塞ノ神Bd式土器 (第6図-4, 第7図-1~3, 第9図-2)

平埴貝塚の第Ⅲ層、Bc式よりやや上層から出土する。胴部の張りはやや弱く、口縁部はラッパ状に外反するが、第6図-4のように再び内彎するものもある。底部は上げ底気味の平底である。貝殻によって口唇部に刻目、口縁部には刺突連点文を施し、まれに胴部に及ぶものもある。胴部には貝殻または篋による格子状文などを施文するが、第6図-4, 第7図-3のように、口縁部に格子状文または平行波線文、胴部に刺突連点文を施文し、施文部位が逆になるものもある。Bc式と異なる特徴は、文様に杵を失うことである。

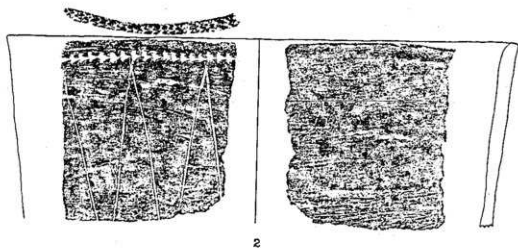
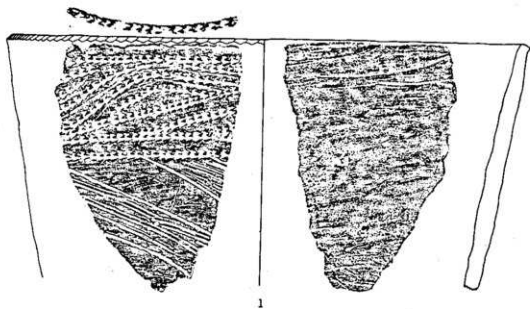
貝殻によって器面を調整し、後で仕上げを行なうが、内面は篋を使用して、胎土の粗い粒子のために擦痕を残すものが見られる。

第9図-1・2は、塞ノ神B式の口縁部の外反がなくなり、直口となったもので、1は文様から見てBc式より転化したものであり、2はBd式から転化したものである。共に貝殻による器面調整後、で仕上げを行なっている。いずれも平埴貝塚出土であるが、これによって塞ノ神Bc式の時期に、既に器形に直口が現われはじめているようである。

塞ノ神B式に直口の土器が出現する遺跡には、加治木町三代寺遺跡^④、志布志町石師遺跡^⑤がある。三代寺遺跡出土の塞ノ神式土器は、ほとんど塞ノ神Bd式である。その中第19図-56~58, 第25図-94, 第30図-125は直口土器である。また石師遺跡出土の塞ノ神式土器は、塞ノ神Aa式・Ab式・Bd式土器がある。その中で、第25図-493の土器は直口で、貝殻刺突文を土器全面にめぐらすものでBd式に属するものである。かくして見ると、直口土器が出現するのは、主として塞ノ神式最後のBd式の時期と言うことができる。現在のところ、直口土器は塞ノ神B式に伴って若干発見される程度で、直口土器を単純に出土する遺跡も発見されていないので、直口土器の出現は、塞ノ神式土器文化における、終末期のゆれを示す現象で、次に発生する土器文化への胎動でもある。

Ⅲ 塞ノ神式土器文化は、はたして天災によって壊滅したのだろうか？

新東晃一は、『鬼界カルデラの爆発(6300年前)によって、塞ノ神式土器文化は壊滅し、無人化した南九州に、他地域より縄文の土器文化が伝播した』としている。誠に面白い意見である。この見解の真否は、九州の先史時代の研究にとって興味ある問題であり、多くの研究者が注目するところとなった。筆者も、何人かの人からこの問題についての「筆者の考え」をただされるところがあった。しかし、ことさらにあげつらうこともなかろうと打ち捨てて来たが、脚下の事実を目を向け



0 10cm

第9図 塞ノ神B式に付属する直口土器(平拵)

ることもなく、再々と同趣の見解が公表されるにおよんで、「一大虚に吠える」の譬もあり、黙するは「同意」とも解されることもあって、研究者としての見解を明らかにしておきたい。

鬼界カルデラの爆発については、新井・町田の研究があり、成尾英仁は、『火砕流（幸屋火砕流）は大隅半島・薩摩半島の中南部を覆い、上部の火山灰（アカホヤ）は琉球列島中部・朝鮮半島・中部日本を含む超広域分布をしている^⑥』と述べている。

かりに、鬼界カルデラの爆発によって、南九州の塞ノ神式土器文化は壊滅的打撃を受けて消滅したとしよう。第1表（1）によって明らかなように、塞ノ神式土器文化は、沖縄および奄美を除く九州全域に分布しているのである。したがって南九州以外の塞ノ神式土器文化は健在であった筈で、この時点で、塞ノ神式土器文化の断絶を唱えることは、文化の継続性に対する認識に問題がある。文化の変遷については、むしろ外的条件よりも、外的条件によって起こる内的反応が、変遷の素因をなすものであろう。

次に、鬼界カルデラの爆発した時期に対する認識についてである。

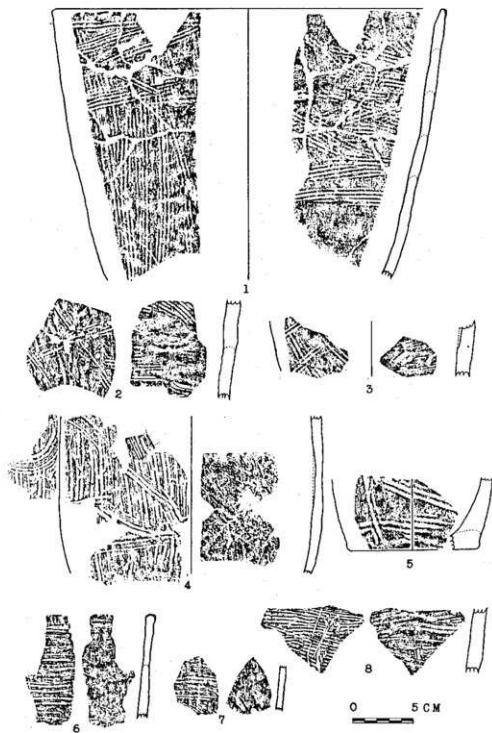
新東は、塞ノ神式土器文化と轟式土器文化との中間の時期とした。これは事実の誤認である。爆発の時期は、塞ノ神式と轟式との中間ではなく、轟Ⅰ式^⑦の直後で、轟Ⅱ式^⑧の出現以前である。このことは志布志町鎌石橋遺跡の調査結果^⑨によって明らかであり、同様の調査結果が、吉田町小山遺跡の調査^⑩でも判明している。その他、轟Ⅰ式土器文化が鬼界カルデラの爆発以前に存在したことは、九州各地の遺跡で発見されている。

巻頭のグラビア写真は、鎌石橋遺跡の発掘時のもので、幸屋火砕流に直撃されて埋没した集石遺構（写真上）と、集石遺構の中から出土した轟Ⅰ式土器の様子（写真下）を示すもので、鬼界カルデラの爆発以前に轟Ⅰ式土器文化が存在したことを証明するものである。写真下の土器は第10図－1の拓影に示されている。

鎌石橋遺跡では、第Ⅳ層が鬼界カルデラの爆発による幸屋火砕流の堆積であり、その下層の第Ⅴ層から轟Ⅰ式土器が出土し、第Ⅲ層からは轟Ⅱ式^⑪土器が出土する。小山遺跡では第Ⅲ層が鬼界カルデラ起源のアカホヤ層であり、その下層の第Ⅳ層から轟Ⅰ式土器が出土し、第Ⅲ層中から轟Ⅱ式土器を出土している。薩南諸島の種子島でも、西之表市二本松遺跡においてアカホヤ層の下層から轟式土器が出土している^⑫。県外で、アカホヤ層の下層から轟Ⅰ式を出土する遺跡をあげると、大分県下菅生B遺跡・桑木G遺跡^⑬があり、宮崎県では内野々遺跡がある^⑭。以上の状況から見て、轟Ⅰ式土器文化は、鬼界カルデラの爆発以前に、既に九州全域に分布していたことが推定できる。以上にあげた鬼界カルデラの爆発時期から見て、当然、南九州においても、塞ノ神式土器文化が、爆発による衝撃によって壊滅したような事態は起こらなかったのである。

第三に、新東は、南九州において塞ノ神式土器文化は、鬼界カルデラの爆発によって壊滅し、他地域より、新たに轟式土器文化がはいってきたものとしている。これは塞ノ神式土器文化と轟式土器文化とは無縁とするものである。

はたして塞ノ神式土器文化と轟式土器文化とは、同一地域に分布し、継起した土器文化であるにもかかわらず、相互にかかわりをもたず、無関係の状態で存在することができたであろうか。た



第10図 表I式土器一率屋火砕流直下出土（鎌石橋）

しかに塞ノ神最後のB式と、次の轟I式とは一見、著しい相違があるように見える。ところが塞ノ神式の終末期の塞ノ神Bd式の時期になると、前に記したように、口縁部のラッパ状外反を欠き、直口の器形が現われる。これは土器型式の終末期に見られる、次期文化への移行現象の一つと見られる。第9図は平栴貝塚出土の塞ノ神Bc式・Bd式が直口になった土器(1・2)であり、第10図は鎌石橋遺跡の幸屋火砕流の直下から出土した轟I式土器である。第9図・1・2の土器の器形と第10図・1・4・7の土器の器形を比較して見ると、ほとんど差異が感ぜられない。文様については、口唇部に刻目を施す点では一致するものの、第9図・第10図の文様については相当のひらきがあるようである。しかし、轟I式に見られる貝殻による格子状文(第10図・1～3)は、塞ノ神Bd式に見られる同趣の貝殻による格子状文(第7図・2)に通ずるもので、両者は文様の上でもつながりのあることを示している。

器面調整に貝殻を使用して、土器の内・外面に条痕を印すのが轟式土器の特徴である。この点で塞ノ神式土器は如何であろうか。たしかに塞ノ神A式について見ると、器面調整に貝殻を使用した痕跡はない。塞ノ神B式の場合も、一見同様に見えるが、注意して見るとしばしば、貝殻による器面調整が行なわれているのである。ただ後に、なぜ仕上げを行なっているために気付かないのである(9図)。

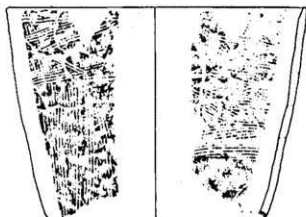
以上に述べたところによって塞ノ神Bd式土器文化と、轟I式土器文化とは、種々の点で近縁性を有することがわかった。両文化は、鬼界カルデラの爆発以前に、既に九州全域に分布しており、爆発とは関係なく、前者から後者へと土器文化の展開があったのである。この後の問題となるが、火山活動の波及範囲よりも、文化圏の広がりの方が、より広域であったために、鬼界カルデラの爆発は、文化の破壊! 異質文化の伝播というような現象とはならず、もっと異なる形をとったのである。¹⁵⁾

IV 轟式土器の分類

轟式土器は、はじめ三森定男によって、鹿児島県金峰町阿多貝塚出土の土器を標式として「阿多式」と命名されたが、大正8年に、熊本県宇土市轟貝塚が浜田耕作の発掘によって著名となり、「轟式」の名が流布するようになった。轟式は土器の表裏面を、貝殻縁で器面調整を行なうもので、更にその上に貝殻縁による格子状文・曲線文・みずばれ状の隆起帯文・点線文・刻目凸帯文・相交弧文などを施した鉢形・深鉢形・砲弾形などの器形を示す土器で、平底と尖底とが見られる。南九州を主として九州全域に分布する前期縄文式土器である。¹⁶⁾

南九州において轟式に先行する土器型式として塞ノ神式が挙げられる。塞ノ神式は、縄文を有するA式と、貝殻縁による施文のあるB式とに分かれ、国分市平栴貝塚や清辺町石峰遺跡において、両者の層序関係が明らかになり、塞ノ神A式が、塞ノ神B式より先行することが確認されている。

塞ノ神B式土器は、終末期になるとラッパ状に外反する口縁部の「反り」を失い、単純な深鉢形平底の器形が、一部に出現するに至る(第9図)。このような現象は、前にも述べたように平栴貝



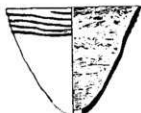
1 (鎌石産)



2 (片野)



3 (片野)



4 (黒川)



5 (黒川)



6 (片野)



7 (片野)



8 (鎌石産)



9 (片野)



10 (日本山)



11 (日本山)

第11図 表I式(1~3) 表II式(4~6) 表III式(7・8) 表IV式(9~11)

塚の他、加治屋園遺跡・三代寺遺跡・石踊遺跡においても知られている。この器形になると、貝殻縁で器面調整を行ない、その上をなで仕上げする手法が行なわれる。これは直口の土器だけでなく、塞ノ神B式にもしばしば見られるところである。一方塞ノ神Bd式に見られる貝殻による格子状文（第7図-3）は、アカホヤ層より下層から出土する古式の轟式（第10図-1～3）にも見られるところである。このような共通性が両型式に見られるところから、轟式が塞ノ神の系統に属し、かつ後続する型式であることは明らかである。

轟式土器の型式分類は、志布志町片野洞穴出土の土器について、層序による分類を行なったが、更に鎌石橋遺跡・小山遺跡・吹上町黒川洞穴・加治木町日木山洞穴・熊本県宇土市轟貝塚その他の資料を参照して、層序に従って分類をこころみた。煩雑をさけ、主要な核となるもののみに従って、4区分を得、古いと思われるものから順に轟Ⅰ式・轟Ⅱ式・轟Ⅲ式・轟Ⅳ式とした。

1) 轟Ⅰ式（第11図-1～3）

轟式土器のなかで最古と思われる型式である。鎌石橋遺跡では、幸屋火砕流の直下から出土する土器（第10図）で、貝殻縁で器面の内外を調整する。小山遺跡でもアカホヤ層直下から同類の土器が出土している。大分県下菅生B遺跡・桑木G遺跡、宮崎県内野々遺跡においても、アカホヤ層の直下から同類の土器が出土していることは前に述べた。

器形は深鉢形で直口が多く、口縁部がわずかに外反するものもみられ、口唇部に刻目を施す。底部については、松本・富樫は轟貝塚の資料によって尖底または丸底としている¹⁸。土器の内外面を貝殻縁で器面調整を行ない、更にその上に殻貝を施文具として、格子状文または曲線文などを施す。

轟Ⅰ式土器は、上にあげた遺跡の他に、志布志町片野洞穴遺跡の最下層から出土して片野Ⅰ式と呼ばれ、日木山洞穴から出土したものは、条紋文土器¹⁹、轟貝塚から出土したものは、轟A式²⁰と呼ばれている。前にも述べたとおり、轟Ⅰ式土器文化は、鬼界カルデラの爆発以前に、南は種子島から北は大分県まで、九州一円に広く分布しており、塞ノ神式土器文化が九州全域に広がっていったあと、轟Ⅰ式土器文化も広域な分布をもつに至っており、南九州において発生した可能性が強い。

2) 轟Ⅱ式（第11図-4～6）

轟Ⅱ式は、轟Ⅰ式に後続する型式である。層序関係は片野洞穴遺跡²¹、黒川洞穴遺跡²²で明らかにされている。土器の内外面を貝殻で調整し、みみずばれ状の凸帯で器面を飾る土器である（第11図-5・6）。胴部が張り、口縁部で外反する丸底の器形と、直口の深鉢形丸底の器形が見られる。黒川東洞穴の最下層から出土した、深鉢形丸底で口縁部にそって数条の三角凸帯をめぐらした土器（第11図-4）もここに含めたが、栗野町花ノ木遺跡の三角凸帯を器面の上半部に、多条にめぐらす、浅い鉢形の土器²³とともに、編年上の位置には問題が残る。轟Ⅱ式は轟式の代表的な型式で、ほとんどの轟式遺跡から出土しているが、南島ではまだ発見されていない。

3) Ⅲ式土器 (第11図-7・8)

Ⅲ式は、Ⅱ式に後続する型式である。片野洞穴では、Ⅱ式出土層の直上の層に、鎌石橋遺跡では、幸屋火葬流の上の第3層から出土している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に貝殻を施文具として連点文を施し、刻目凸帯を貼付する土器である(第11図-7・8)。土器表面の貝殻縁による条痕が、微かに見える程度のももある。宝島大池遺跡では、赤連系土器とともに出土し、また片野洞穴では、貝殻条痕を地文とする簀烟式土器と相伴している。

4) Ⅳ式土器 (第11図-9~11)

Ⅳ式は、Ⅲ式に後続する型式である。片野洞穴の層序によって、Ⅲ式との関係が判明している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に貝殻縁を施文具として、連続して弧文をジグザグに施す土器である(第11図-9~11)。日本山洞穴出土の相交弧文^{②)}に該当する。

註

① 立神次郎・中村耕治 「柳遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書、志布志町教育委員会 1980

② 山内清男 「日本原始美術」 1 縄文式土器 講談社 1964

③ 河口貞徳 「壺ノ神式土器」 鹿児島考古 第6号 鹿児島県考古学会 1972

④ 新東晃一・弥栄久志・牛ノ浜修 「三代寺遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 鹿児島県教育委員会 1979

⑤ 立神次郎・中村耕治 「石橋遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 志布志町教育委員会 1979

⑥ 成尾英仁 「間間岳噴出物と遺物の関係」 鹿児島考古 第18号 鹿児島県考古学会 1984

⑦ 河口貞徳・本田道輝 「中雨洞穴」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 2 知名町教育委員会 1985

本文後半にも記述す。

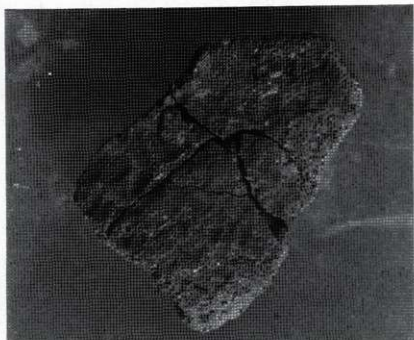
⑧ ⑦に同じ

⑨ 河口貞徳・峯崎幸清・上田 耕 「鎌石橋遺跡」 鹿児島考古 第16号 鹿児島県考古学会 1982

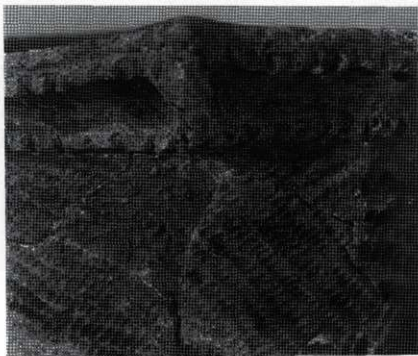
⑩ 戸崎勝洋・立神次郎・河口貞徳 「小山遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (20)

鹿児島県教育委員会 1982

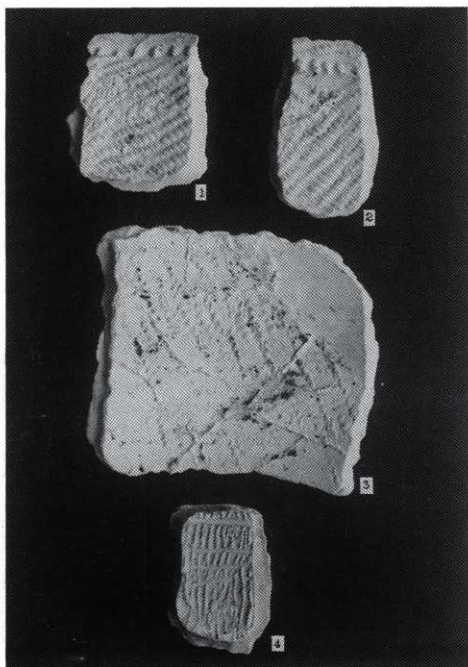
- ⑪ ⑦に同じ
- ⑫ 蚊島安豊氏告示
- ⑬ 坂本嘉弘 「第二節 縄文時代の発展」 大分県史先史編 大分県 1983
- ⑭ 野間重孝・緒方博文・菅付和樹 「内野々第Ⅰ遺跡」 生目台住宅団地計画区域内埋蔵文化財等調査報告書 宮崎市教育委員会 1982
- ⑮ 河口貞徳・西中川駿 「鹿児島県下の魚獵活動」 季聞考古学 第11号 雄山閣 1985
- ⑯ 三森定男 「縄諸型式土器」 日本考古学辞典 日本考古学協会編 1962
- ⑰ 河口貞徳 「鹿児島県片野洞穴」 日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1967
- ⑱ 松本雅明・宮腰卯三郎 「縄式土器の編年」 考古学雑誌 第47巻第3号 1961
- ⑲ 樋口清之・乙益重隆 「鹿児島県加治木日本山洞窟遺跡の研究」 史前学雑誌 10巻2号 1938
- ⑳ ⑱に同じ
- ㉑ ㉑に同じ
- ㉒ 河口貞徳 「鹿児島県黒川洞穴」 日本の洞穴遺跡 平凡社 1967
- ㉓ 鹿児島県教育委員会 「花ノ木遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 鹿児島県教育委員会 1975
- ㉔ ㉔に同じ



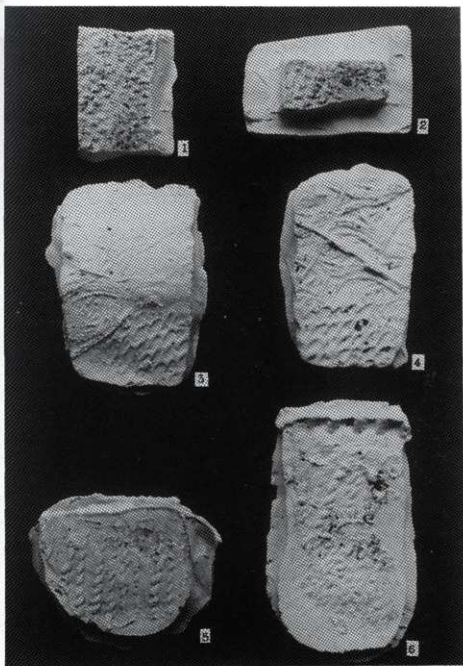
1 押圧縄文(石峰)



2 単節縄文(木場) L { R
R



1・2：半節縄文（木場）L { $\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}$ 3：摺糸文（石峰）R { $\begin{smallmatrix} | \\ | \end{smallmatrix}$
 4：凸帯摺糸文（石峰）r

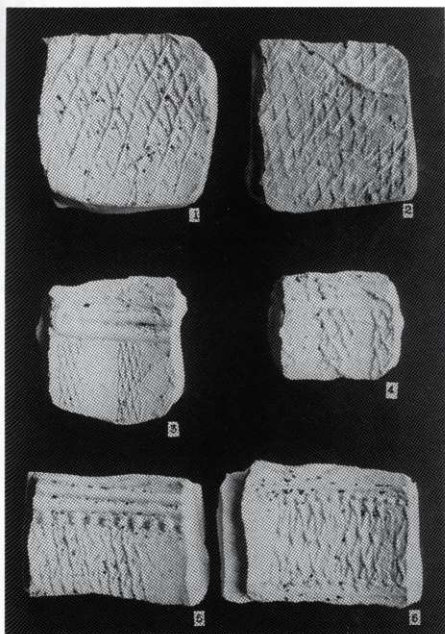


1・2：複節繩文（石峰4b層）L { $\begin{matrix} L \\ R \\ L \\ R \\ L \end{matrix}$ } 3・4：石峰式（石峰）R { |

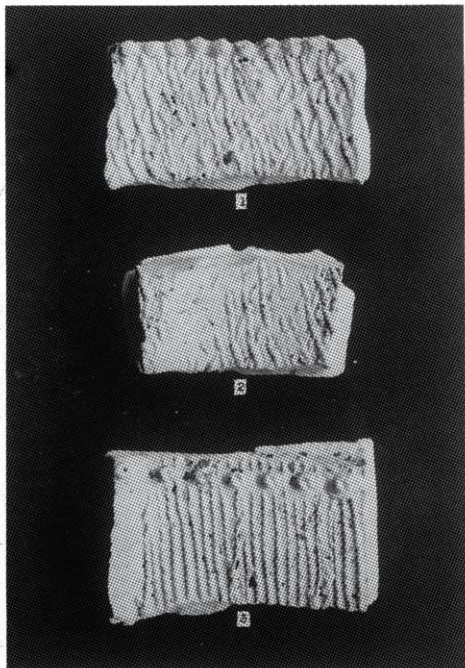
5・6：手向山式（石峰）R { |



平栴式(平栴): 結束第2種 中央: R { $\begin{matrix} | \\ | \end{matrix}$ 左: L { $\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}$ 右: R { $\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}$

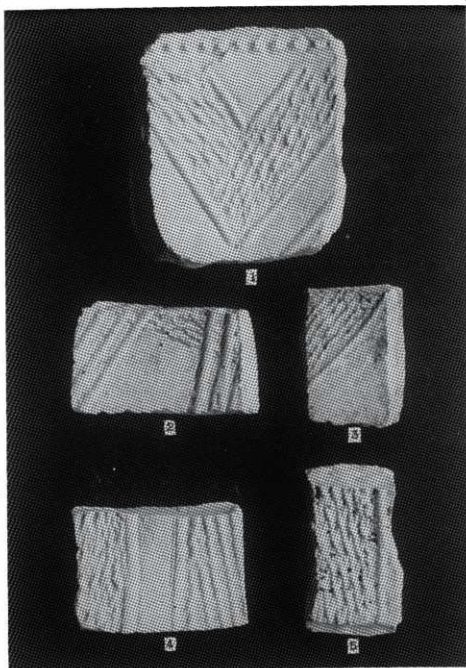


1: 網目文(石峰)R { | 2: 網目文(石峰)r 3: 壺ノ神Aa(石峰)r
 4: 壺ノ神Aa(石峰)R { | 5: 壺ノ神Aa(和田前)L { ^r_r
 6: 壺ノ神Aa(石板上)R { |

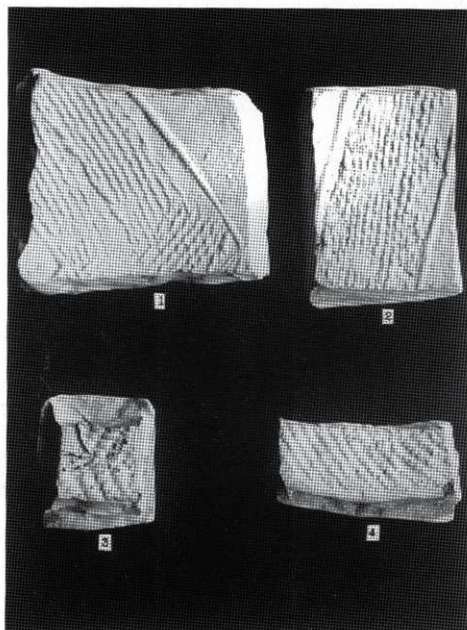


1: 塞ノ神Aa (和田前) L { $\begin{smallmatrix} \text{r} \\ \text{r} \end{smallmatrix}$ } 2: 塞ノ神Aa (和田前) L { $\begin{smallmatrix} \text{r} \\ \text{r} \end{smallmatrix}$ }

3: 塞ノ神Aa (小山) L { $\begin{smallmatrix} \text{r} \\ \text{r} \end{smallmatrix}$ }



- 1: 塞ノ神Ab (鍋谷) L { $\begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix}$ } 2: 塞ノ神Aa (小山) R { $\begin{smallmatrix} | \\ | \end{smallmatrix}$ }
 3: 塞ノ神Ab (平栴) r 4: 塞ノ神Ab (鍋谷) R { $\begin{smallmatrix} | \\ | \end{smallmatrix}$ }
 5: 塞ノ神Ab (和田前) L { $\begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix}$ }



1: 壺ノ神Ab (鍋谷) L { $\begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix}$ } 2: 壺ノ神Ab (小山) L { $\begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix}$ }

3: 壺ノ神Ab (平椅) L { $\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}$ } 4: 壺ノ神Ab (平椅) R { $\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}$ }